

# 聞名仏教

第 159 号 毎月発行  
(発行日) 2023 年 12 月 1 日  
発行所: 真宗大谷派念佛寺  
〒 663-8113 西宮市甲子園  
口 2 丁目 7-20  
JR 甲子園口駅下車歩 4 分  
電話 (0798・63・4488)  
(発行人) 土井紀明  
<http://nenbutsuji.info/>  
アドレス nenbutuji6@gmail.com  
ゆうちょ銀行(ドイノリアキ)  
記号 17810 番号 7259431

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉  
毎月 22 日 午後 2 時始  
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み  
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉  
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)  
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

# 如来のお見ぬき 佐々木蓮磨

香樹院徳龍師は真宗大谷派の歴代講師の中でも、特に徳の優れた名師でありました。

当時の世評に徴しても、「聖道門の律僧も香樹院の行徳には遠く及ばぬであろう」とか、または「香樹院は普通の人間ではない、おそらく権化の人であろう」と讃えたことよって明らかであります。

あるとき、一人の同行が師に向って「和上ばかりは名聞利養の心はないでしょう」と申し上げると、師はにわかには襟を正して「おまえたちに名聞利養の心がないように見えるところに私の名聞利養の心が動いているのだ」と答えられたそうです。

またあるとき、一人の同行が師に向って「和上、近来はけしからぬニセ同行が横行するので困ります」と申し上げると、師は「どんな同行がいるのか」とお尋ねになったので、今の同行は得意な顔つきで「実は先日もある旅の同行

だと言って訪ねてきましたので座敷に上げて夕食を出し、その晩はおそくまで仏法の話をし合ったのですが、なかなか立派な話をするので、私は敬意を払い、その晩は仏間に寝かせたのであります。ところが翌朝、仏間に行つて見ると、驚いたことには仏様の方へ足を向けて寝ているのです。

こんな同行がいるので困つたものであります」と申し上げると、師は厳然として膝を正し、今の同行に向つて言われるには「そんな同行がいたか、しかし私は自分の心を顧みる

とき、その同行を笑うことも、とがめることもできぬ。私は毎日法衣を着け、念珠をつまぐり、仏に真向きになつて念仏はしているが、心に尋ねてみると、悲しいことには、いつも仏に尻を向け通しである」と述懐されたので、今の同行は恐れ入つて穴でもあつたら這入りたような気持ちになつた、ということでもあります。

なんとという徹底した態度でしようか。権化の聖者とまで仰がれていた香樹院にして、こうした言葉が出たというこ

とは、不思議なようで不思議でない事実であると思います。行の厳格な人は、他を裁き人をとがめ易いものです。またその反対に人の罪や過失を咎めないような人は、自己の行為に對してもルーズになり易いものであります。ところが香樹院は自己に對しては極めて厳格であるが、他人の悪や非に對しては、それを許すとい

うよりは、むしろ、その中に自分の心の姿を見て行かれたのであります。こういう見方は人間の心では到底でき

ないことではない。人間の心は、どう考へても他を悪く見て自分を

善く見、他の悪は非難し自分の悪は弁護するものです。自分に對しても他人に對しても、また善行に對しても悪行に對しても、ひとしく虚仮不実と見る知恵は仏から与えられるものでなくてはなりません。親鸞の教は人間親鸞の教ではありません。人間親鸞を超えて、しかも人間親鸞の口から現れる仏の教えであります。近ごろの学者がよく「親鸞の思想」ということばを使われるようですが、これは考慮すべきことではないでしょうか。人間親鸞の思想は二十九歳の入信以来、つねに否定されつつ九十歳まで生きぬかれたものと思ひます。(了)

## 《 念佛寺報恩講 》

十二月二十二日 (金) 午後二時始

講師 滋賀県・大谷派玄照寺住職 瓜生 崇師

\*法話は午後のみです。

# 対話編 『浄土真宗』

5

B 「アミダ仏は寿命無量、いわばはかりなきいのちのはたらきといわれていますが、前は万物は寿命無量によって、寿命無量において、寿命無量のはたらきの現れであるとお聞きしました。では万物にはそれぞれの姿やかたちがありますが、それはどう考えたらいいのですか」

A 「万物は仏教では大きく分けて、非情と有情に分けます。いわゆる心なき物（非情）と心ある物（有情）です。石ころや水や空気は心なき物ですし、人間や犬や動物一般は物であるとともに心の働き、意識の働きをもった物です」

B 「現代では、物はすべて原子や分子、いわば素粒子の集まりでできているといわれますね」

A 「ええ、物体は素粒子の結合でできているといわれますが、なぜそれぞれの姿かたち、それに機能が違うのだろうかということですが、それは縁

が違うからといわれます」

B 「この場合の縁とは」

A 「縁とはさまざまな条件とということです。一つの物（果）が成り立つにはさまざまな条件が重なりあつて一つの物の形になります。バラの花は球根があり、土があり、水があり、光があり、その他のいろいろな条件が重なってバラの花が咲くように。そしてこうした条件（縁）の中で主な条件を因といたりします。バラの場合、バラの球根は縁の中で主たる縁ですから球根は因であり、その他の土や水や陽光などは他の縁です。そうすると一つの物は因と縁（因縁）によって成立しているといわれます」

B 「さきほどの非情という心の無き物はさまざまな物質的要素としての縁が集まってできた物ですね。石ころにしても水にしても鉛筆にしてもスリーブにしても物質の集合体ですから、様々な物質的な縁

の集まりですね」

A 「諸縁の統合体ということですが。そういう無量無数の縁が寄り集まり、又離散していく。こうして万物は変化しづめであり活動しづめです」

B 「では心ある物としての有情の場合はどうですか」

A 「有情の代表は人間ですから人間の場合で言いますと、人間は肉体と精神、いわば物質と意識の統合体ですね。物質的な縁と意識的な縁との統合体ですから、これも諸縁の寄り集まりによってできていると言えるでしょう。人間には意識があるのですが、意識の働きが高度であつて、いろいろ考えて判断したり選んだりして、そのつど行為をするべく生きています。いわゆる限定的ですが自由があるので。ここが他の動物との違いです。他の動物にも意識がありますが、意識活動は制限されています。自由は少なく、行動は本能的です。人間の自由は人間が作り出したのではなく人間に生まれた時から具わっています。その自由も大変限定的です。限定的ですが、今ここでどう生きるか、どう判断し何を選択するかという自由があります。だからいろいろなものを作り出す（形成する）ことができます。家を建てたり、米を作ったり、絵を描いたりします。しかしまた、自由があるということは自らの善悪の行いに責任があるということ。是非善悪とは同時に、行いの是非善悪がそのつど問われます。しかもこうした自由は、（自由であるべく定められている）ともいえます」

B 「人間はそのつど判断し選び決定して行動するように定められているんですね。それと、どうして人間という形がこの世界に出てきたのでしょうか」

A 「これを仏教の教えによつて言えば、この世に生まれる前に人間に生まれるような因をもったからだといわれています。人間に生まれる因は過去世での善悪の行いによつて人間に生まれるべき因を作つ

たからであると云われます」

B 「過去世で人間に生まれるような行いをしたから人間に生まれたのですね。もしそういう行いをしない場合はどうなるのですか」

A 「人間以外の有情に生まれるといわれています。たとえば重罪を犯すと地獄の有情になり、善い行いを重ねると天人に生まれるといわれます。その他に餓鬼とか畜生（動物）など大きく分けて五つ六つの有情があると言われています。こういう事は人間の智慧では確かめることは困難です。インドの聖者たちが直観的に感得したことだと思えます。ただ私たちが普通の知性で知れる範囲がすべてではありませんが、この世界は不思議で満ちあふれていますから。余談ですが、最新の天文学の話聞きますと、太陽のような恒星が無数なほどあるというこの広大な宇宙が、さらにまた無数にあるとまで天文学者がいっていました。マルチバース説というのだそうです。そうなる他にどんな生き物が存在しているか想像を超えています」

B 「人間の科学的な知見ですべて分かるとはともいえないですね」

A 「ええそう思います。また、因果の道理を説く仏教では、善悪の行いにはそれに報われる結果が出ると説きますので、現世での善悪の行いの結果が来世なりそれ以後の生で報われると説かれ、行いの善し悪しによって、来世での苦楽の境界に違いが出てくると、そう説かれているのですね」

B 「なかなか信じ難いですね」

A 「こういう考えはすぐには受け入れられないかも知れませんが、たとえば人は死ぬと今までやってきたどんな罪も帖消しになり、どんな重罪を犯しても、その人の死後に何の影響（報い）もないというのもうなづけけないですね。因果応報の見方は絶対的な真理とはいえませんが、それを無視することもできない深いものがあると思います」

B 「そうすると私たちは同じ人間ですが、これは同じ人間に生まれるような善悪の行い（業）を生まれる前に為してきたから、この世で同じ人間に生まれたといわれるので

すね」

A 「ええそういわれています」

B 「では人間としては同じでも、人間の能力の差とか性格の違いとか姿形の違いがあるのは何故ですか」

A 「それは人間になるような行いを為したと共に、それ以外の善悪の行いの違いやさまざまな他の縁の違いによって変わってくるのです。それで一言で言うと業因縁の違いといえます」

B 「業因縁とは」

A 「業因とその他の縁ということ。善悪の行いとしての業という因の外にいろいろな他の縁が加わって、人間に生まれる業因は同じ――これを共業といいます――でも、それだけではなくさまざまな他の縁の影響があつて違いが出てくるのだといただいています」

B 「要するに万物の一つ一つはさまざまな縁が重なって出来上がっているのですね。その中で人間は人であるという限界の中で自由があるといわれるのですね。どちらにしましても人間の身心は自分の作ったものでもなければ神が作

った物でもない。多くの因縁によってできた身心としての存在なのです。ではさまざまな物と物との関係はどうなのですか」

A 「それはお互いに関係し合っていて、孤立している物は一つもありません。たとえば人間は空気や太陽や大地などさまざまな物との密接な関係の中でしか生存できません。身体の中の胃も肺臓も心臓も他の器官などお互いの関係の中で存在し得ます。心臓が心臓だけで動くことはできません、肺臓や血管など他の機能との関わりの中で動くことができるのです。万物は関係しあつてのみ存在しています」

B 「では人間を含めた万物と寿命無量はどういう関係があるのですか」

A 「こうしたさまざまな物は関係しつつ存在しているのですが、そういう物や関係が成り立つ場、力、作用がなければなりません。存在し得るのも、動き得るのも、関係しえるのも、それを可能にしている力というか場というか材料というものがあつて、それが万

物の成立根拠です。それは無限の力用であり無限定であつて、そういう働きの全体、それは形なき無量のはたらきそのものです。それを寿命無量というのです」

B 「難しいですね」

A 「あえて譬えてみれば、海水と波のようなものです。海水は無量のいのちにあたえられ、波は大小さまざまな一つ一つの物に譬えられます。海水から波が現れます。大海はさまざまな波の根拠であり、波の起こる場所であり力です。そのように私たちにとつて寿命無量はいのちの広大な海のようなもので、そのいのちが縁あつて一つ一つのかたち（波）を取つたもの、それが私たち人間の存在であり、ひいては万物の存在です」

B 「それぞれのものに姿形が違ふのは縁によつて違ふと言われましたが、それは大海の海水がそういう形を意図的に生み出したのではなくて、さまざまな縁によつていろいろな形になるのですね。」

A 「ええそうです。さまざまな形の原因は海水そのもの原因ではなくて、波と波のぶ

つかり合いだとか吹く風の大さきなどによつて大小さまざまな波になるようなものですね。物と物との関わり合いや、風などの外から影響によるのでありましょう。海水は材料であつても形を取る原因ではありません。そのようにさまざまな物の姿形が違ふのは寿命無量のはからいではなくて、そういうさまざまな縁の影響によつてです」

B 「人間の姿形に変わりがあるのはその人の過去の因縁や環境の縁などによつていろいろな形になるのですね、そしてまた縁によつて次々と変化するのですね」

A 「そうですね。仏教では人に生まれたのは過去の業因と諸縁によつてであると云われるのですが、人間の心の感性（業感）や性質などの違いは主に過去世での行為の善し悪し（善悪の業）が関係しているといわれます。こういうことは仏の説法によつて教えていただくのであつて私たちの凡夫の智慧で推し量ることは到底できませんが、これには深いわけがあると思われます」

# 信心夜話

金子大榮師の『大無量寿經  
総説』に、

「阿弥陀仏という絶対無限の力が相対的な私たちをこつてい  
る。衆生往生せずば、われも仏  
にならない」といふ、いわば条  
件づきであります。法蔵菩薩の  
願力というのは阿弥陀仏の力  
の自己限定である。だから願は  
自由自在ではない。

無限の力ということはおも  
うままになんでもできるとい  
うことでは決してない。本当の  
慈悲の力、本当の仏のお心とい  
うのは、そういうふうにご自己を  
限りなく限定していく、その内  
側に無限の力があるのである」と  
あります。

一昨日この金子先生の文に  
接し、有り難くて書いてみま  
した。阿弥陀仏の慈悲とは阿  
弥陀仏ご自身を限定されると  
云うことなのです。自由自  
在な阿弥陀仏がご自身の方か  
ら、憐れみから、大悲から、  
衆生が求めたり願ったりする

前に、私たちの苦しみ  
に共感して、救いたい  
と願いを起し、ご自身  
を一切衆生に縛り付け  
て、私たちと一つに結

びついて下さっているのです  
ね。阿弥陀仏の誓願とは「衆

生往生せずば、われも仏にな  
らない」といふ阿弥陀仏の約  
束です。阿弥陀仏がご自身の  
自由を否定して、自己否定し  
て、一人一人の衆生にご自身  
を引き渡されるのです。約  
束の約は「くくりつける」と  
いうことで、いつでもどこで

も私たちと共にいて、「汝が仏  
にならないようなら私も仏に  
ならない」と、ご自身を私に  
くくりつけて下さるのですね。  
阿弥陀仏は「たとい、身をも  
ろもろの苦毒の中に止ると  
も、我が行、精進して、忍び  
て終に悔いじ」（仮令身止諸  
苦毒中 我行精進 忍終不悔）

とまで、私たちのために身を  
捧げて下さる。私が地獄に墮  
ちても、地獄の苦しみの中  
まで運命を共にし、「そのま  
まなりで引き受ける」と仰せ下  
さっている。

それなのにこの私はその大  
悲の極まりの仰せであり、は

たらきを無視して、あらぬ方  
向に急いでいる。まことに阿  
弥陀仏のお心を痛め続けて来  
たのでしよう。しかも阿弥陀  
仏を悲しませていることも知  
らずに、流れ転がって、今、  
人間としてここにいます。

金子先生は「阿弥陀仏の力  
の自己限定」と仰せられます。  
阿弥陀仏は廣大無辺なお力で  
あり働きですが、廣大無辺な  
はたらきだけではこの世のチ  
リにも等しい私にはとうてい  
分からない。手がかりがない。  
知りようがない。それゆえひ  
とりぼつちで流れ転がってい

かなくてはならない。そうい  
う「独り生まれ・独り死し、  
独り去り、独り来る」と無量  
寿經に説かれていくように、  
ひとりぼつちで流れ流れて今  
ここにいます。そのような愚か  
な小さな存在である私たち一  
人一人に、阿弥陀仏ご自身が  
自己を縮めて縮めて、それこ  
そ自己限定して「南無阿弥陀  
仏の名号」となつて、今ここ  
に「ナムアマミダブツ」「ナムア

ミダブツ」と名のり続け、喚  
び続けて下さっている。本當  
に大慈大悲のゆえの自己限定

の極まりがお念仏のお声です。

の極まりがお念仏のお声です。

そして衆生を仏にするため  
に仏因を、阿弥陀仏が私たち  
に代わつて、法蔵菩薩として  
難行苦行して仕上げてください  
り、さらにその仏因を南無阿  
弥陀仏として私たちに与えて

くださる。法蔵菩薩は阿弥陀  
仏の外に無く、ご自身のため  
には修行も苦行の一つもいら  
ないのにもかかわらず、衆生  
のために、仏因など全くなく、  
また仏因を成就する力の全く  
ない私たちに代わつて、難行  
苦行を永劫かけて修して下さ  
った。これこそ、阿弥陀仏が

ご自身の安樂を否定し、ご自  
身を限定し、ご自身を私たち  
に与えるために苦勞を代わつ  
て下さった、これが阿弥陀仏  
の自己否定でありましょう。  
金子先生が「自己を限りな  
く限定していく、その内側に  
無限の力があるのである」と  
仰せになつていますが、こう  
いう自己否定・自己限定をな  
される、そのことが阿弥陀仏  
に無限の力がましますという  
徴だといわれる。本當にそ  
のように感じます。 (了)

の極まりがお念仏のお声です。

## 【住職雑感】

坊守が母親の介護のため五日  
ほど実家に帰る。日頃、家事一  
切を坊守がしていたので、ご飯  
の炊き方や洗濯の仕方を教えて  
貰つて家事をする。おかずは隣  
りに息子夫婦がいるので若嫁さ  
んがもつてきてくれる。ゴミの  
収集、食後の片付け、電話の受  
付、荷物の受け取り、洗濯物を  
干すなど、その合間にお参りか  
ら事務的な作業、買い物などで  
小忙しい。最近は独居老人が多  
いが安樂な隠居生活と言うには  
ほど遠いことが知れる。今私の  
住んでいる処は非常に便利など  
ころなので、随分樂をさせて貰  
っているが、生活に不便な場所  
の独居や高齢者の生活は推して  
知るべしである。念佛寺のご門  
徒の中でも独りで生活をしてい  
る人はそこそこおられるが高齢  
になると独りでの生活が難しく  
なる。それかといつて介護施設  
は慢性的な人手不足というから、  
将来はどうなるのであろうか。

それでも時は止まらないし、  
いのちは行き詰まらない。死は  
行き詰まりではない。死の扉は  
開いているのである。浄土へと。